

第十章
広報官

田中の部屋に入り浸りの大家が缶コーヒーをすすっている。

「大家さん。最近このテレビ、電源が入りませんね」

大家は缶コーヒーを小さなテーブルに置くとおもむろに口を開く。

「そういえばそうじゃ。時々疑問を投げかけたりして脇の下をくすぐっておるが、反応がないのう」

「えっ！。山本さんの脇の下、どうやってくすぐってるんですか？」

「アホか。たとえ話じゃ」

「そうか。安心した」

「何かあったのかのう？ 心配じゃ」

この言葉に反応したのかテレビが「ビビビッ」という音が出すと黒い画面がパッと明るくなる。

「お久しぶりです」

「元氣そうだ。脇の下、大丈夫ですか？」

「脇の下？」

大家が笑いながら山本に尋ねる。

「何をしていたのじゃ」

「日本政府の新型コロナウイルス感染症の対応が後手後手なので、海外ではどのように対応し

ているのか、取材していたのです」

「えー。こんな時期によく出国できたなあ。ところで今は日本に？」

「はい。先ほど戻ってきました」

「どうやって出国して入国したんだ？ PCR検査は？」

山本が少しだけ得意げな表情をする。

「心強いスポンサーのプライベートジェットで何カ国か取材してきました。もちろんPCR検査はいやと言うほど受けました」

「山本さんの留守中、日本でも感染が拡大したけれど、政府は相変わらず『強い危機感をもって事態を注視している』と言うだけ。やっと昨日『来週緊急事態宣言を発出するかどうかを判断するため専門家による諮問会を開催する』とのんきなことを言っておる」

「注視ばかりしているから目が疲れて何も見えなくなったのね」

「ところでこのタイミングで戻ってきたのは？」

「緊急事態宣言発出時の記者会見であることを計画しているからなの」

「これまで首相や政府がちやっちやとアナウンスしたのはゴーツー・キャンペーンぐらいかな。ところで『ある計画』というのは？」

「今回諸外国で感じたのはどの国の政府も記者会見での説明が明瞭で具体的なの。それに質問時間の制限はありません。どこの国の政府も論点をそらすことなく真つ正面から懇切丁寧に説

明します」

大家が空の缶コーヒーをテーブルから取り上げる。

「そんなこと、当たり前じゃ。しかしじゃ、ついこの間の記者会見でも総理は『同じ内容の質問ばかりなのでこれで会見を打ち切る』と言ってさっさと会見場を抜け出したのじゃ」

「記者の方にも問題があるのかも知れないけれど総理の姿勢は問題だわ。他の国ではあり得ないこと……」

山本の言葉を遮って田中が小膝をたたく。

「山本さんの企み、分かった！」

「企みじゃないわ」

「わしも分かったぞ」

田中と大家が例のテレビを熱心に見る。どこかに山本がいるはずなのだ。さて総理大臣と少し遅れて新型コロナウイルス感染症対策諮問会の座長が記者会見場に現れる。早速女性の政府広報官の声が会場に響く。

「ただいまから総理の会見を始めます」

「年配の女性より若いアナウンサーの方が気が利いているのに」

田中が文句を言うと山本の声がどこからか聞こえてくる。

「政府広報官という地位は総務省の事務次官に次ぐ役職で単なるアナウンサーやキャスターではないすごーく偉い人なのよ」

「ふーん」

癖なのか演台のマイクを少し触れてから総理大臣が緊急事態宣言発出に関する説明を始める。説明と言っても中身のないつまらないもので国民の心に響くような熱の籠もったものではない。それもそのはずで総理はついこの間まで七年以上も官房長官をしていた。そのためか総理大臣談話と言うより官房長官談話といった方がふさわしい雰囲気漂う。田中が以前言っていたとおりだった。

「各大臣におかれましては、監督省庁にテレワークを徹底させるようお願いするとともに……」
自分が総理大臣であることを忘れたような言葉が随所に出てくる。真正面を見ることなく机上の原稿の棒読み（棒読みなのに間違ったり詰まったりする）が終わると広報官が記者に一礼する。

「それでは質問を受けます。挙手の上、名前と所属を明らかにしてから質問してください。ただし希望者が複数ある場合はこちらから質問者を選定させていただきます。時間の都合上国内のプレスから二名、海外のプレスから一名といたします」

「えー！ たったの三人！」

すぐさま山本が挙手する。

「わあ！ 山本さんだ。格好いい！」

「黙って聞くのじゃ」

ほかに手を上げる者はいない。以前山本が所属する放送会社に意地悪をした他社の記者たちが今回は結束して山本を応援している。広報官は少しうろたえながら他の質問者を探そうと見回す。するとある記者が促す。

「人数や時間制限をするのならさっさとこの女性記者を指名してください」

強力な援軍だ。山本は立ち上がると所属と名前を告げて一礼する。

「まずお願いがあります。総理には国民が『なるほど』と理解できるような回答をお願いします」

総理が官房長官時代に記者会見でボコボコにされた記者だと気付くのに時間はかからなかった。しかし、就任したばかりの広報官はそのようなことは全く知らない。同じ女性だからと言う安心感からか気軽に応じる。

「もちろんです。それではどうぞ」

「危機感とか、緊張感とか、スピード感とか、調整とか、連絡を取り合っているとか、専門家の意見を聞いているとか、各知事の意見を集約しているとか、共有しているとか、注視しているとか……これらの言葉の意味を国民は十分理解しています。質問者や時間を制限するならば具体的な言葉でお答えいただきたい。この会見を終わったら私どもは国民にアンケート調査しま

す。よく分からないという声が多ければ再度質問する機会を設けていただくことを要望します。それでは質問に入ります」

想定外の言葉に総理や広報官の顔が歪むが、記者たちからは無言の拍手が起こる。

「テレワークを徹底しろとのこと。政府ではどれくらいの割合でテレワークが実施されているのですか？　こんないい方法もあるという事例を紹介して事業者にアドバイスする予定はありますか？　デジタル化に熱心な総理のことですから明確な答えを期待しています」

てつきり緊急事態宣言発出関連の質問を想定していた首相はマイクの前でしばらく沈黙する。つまり事前に通知されていた質問内容とは全く異なる質問だったからだ。これまでは記者から「こういう質問をします」という事前通知があったが、そんなルールを無視した山本の質問に総理は絶句したまま。もちろん山本の質問はテレワークを推進する政府の姿勢に関するものでピント外れの質問ではない。

なぜか会場内に備えられた大型液晶モニターに首相の会見用の机に置かれた「想定問答」と題された書類が映される。すると山本がダメを押す。

「これまでは事前に会見内容を知りたくて、記者も事前に質問内容を提示しましたが、そういう慣例を廃止していただくようお願いします。と言うわけで先ほどの質問に答えていたいただきたいのですが」

会見場にいるどの記者も大きく頷く。ようやく総理がぼつんと答える。

「政府内のテレワークの実施率につきましてはただいま集計中です」

異常な空気が流れるなか、広報官がkaroujite引き継ぐ。

「次の質問に……」

広報官を制止するように山本が両手を広げる。

「待ってください。民間企業にテレワーク実施率の公表を迫るのであればその前に政府の実施率を公表すべきではありませんか。今すぐこの場で各省庁に急いで集計するよう指示してください」

karoujite総理の一番近くにいる官房長官を呼び寄せて何やら伝えると山本に向かって言葉を発する。

「テレワークの実施率について急いで集計するように官房長官に指示しました」

官房長官が記者会見場を出て行く。山本は広報官が何も言わないのでたたみかけるように続ける。

「さて記者会見というのは国民に語りかける場でもありません。ところがいつも遅きに失した対策と具体的な説明がない会見なんて意味がないのではありませんか。総理は総理自身の記者会見の視聴率が低いのをご存じですか？ この放送局も冒頭のみを流すだけで、あとは事前に入手した資料で専門家の解説を放送します。つまり総理の言葉に関心がないのです。もっと具体的な決定に至る経緯や説明をしないと国民は聞く耳を持ちません。これは総理と言う

より広報官の仕事かも知れませんが、どう思われますか」

まるで子供を叱るように山本が首相をせかす。

「何かおっしゃってください」

総理大臣が広報官を呼びつけて小声で指示する。

「会見時間が過ぎたとでも言って打ち切れ」

田中と大家が見ているテレビではこのささやき声がきちんと流れる。すぐさま山本が反応する。

「何をこそそと話し合っているのですか？ 今のこそそ話すべて漏れてますよ」

頭髪の少ない総理の頭全体が真っ赤になる。

「お答えいただけなければそれはそれで結構です。ところで総理と報道機関の質疑応答に時間制限をなぜ設けるのですか？ 他国ではあり得ないことです。ひよつとしたらこのことが原因で視聴率が落ちているのかも知れません」

広報官は開きかけた口を閉じる。そのとき外国人記者が無断で発言する。

「制限ヲ設ケテイル国ハ民主主義国家デハ日本ダケデス」

会場が大騒ぎになる。広報官が総理大臣を庇うように会場の出口に誘導する。いつの間にかその広報官の前に山本が立ちはだかる。

「広報官！」

返事はない。

「あなたは今国民に非常に失礼な広報をしています。おわかりですか」

それでも総理の背中を押すように会場をあとにする。その後ろ姿を見て大家がふっと息を吐き出す。

「情けない光景じゃ。我が国の恥じゃ」

ここで総理大臣の横に控えていた諮問会の座長がマイクを持ち上げて山本を呼び止める。

「私で良ければ、今回緊急事態宣言発出に至った経緯についてお答えできる範囲で質問を承りますが」

これまではできる限り総理大臣を支える方向で会見に応じていたが、第二波、第三波と感染者が増えるとやはり学者としての良心を抑えられなくなったのか、実直に意見を述べるようになった。そうすると徐々に総理とそりが合わなくなった。このことは週刊雑誌などで報じられてはいた。

広報官が不在なので先ほどの外国人記者が流ちょうな日本語で話し始める。

「なぜ総理より専門家の座長に質問しないのか不思議に思っていました。さてお言葉に甘えて質問させていただきます」

山本が大きな声で「どうぞ」と勧める。

「ありがとうございます。さて日本はアメリカやEUと比べて人口当たりの感染者数が二桁も

低い。しかも高度な医療設備が整い、優秀な医師や看護師も多い。それなのに医療崩壊が起きている。どうしてですか？」

まさしく専門家に尋ねるべき内容だ。広報官が戻ってきたがすでに会見場は記者たちに選挙されていて報道カメラマンが忙しくカメラを操作している。そんな中座長はメモ書きを見ながら落ち着いてしゃべり出す。

「ただいまのご質問はまさしく最大の問題点であります。この問題を分析して解決方法を議論しなければ今後の方針は立てられません。もちろん我々としては善後策を提言して参りましたが『目詰まり』の一言で片付けられました」

この言葉に広報官はもちろん会場に残っていた政府関係者は沈黙する。

「本当の意味での会見が始まる。所詮総理は素人。プロの意見が直接聞ける」

田中がテレビ画面を凝視する。

「今医療現場で倒れそうになりながら何とか踏みとどまっているのは国や自治体など公共的な病院に勤める医師や看護師です。大学教授とはいえ私も医者ですから悪く言いたくありませんが、医師会は医療崩壊を懸念しても、先ほどの勤務医を助けようとはしません。医師会の半分を占める開業医に勤務医の負担を減らす要請を出すことはありません。いくつかの民間病院でも新型コロナウイルス感染者を受け入れていますが、そこにいる勤務医も公立病院の……」

急に座長の目に涙が浮かぶ。

市町村医師会、都道府県医師会、全日本医師会には約六割の医師が加入している。そのうち市町村医師会や都道府県医師会にだけ加入している医師が約一割いる。つまり全日本医師会に加入している医師は約半数に過ぎない。

そのうちA会員（医療機関の経営者）は約八万人、B会員（勤務医師）は約九万人でややB会員の方が多い。しかしながら四十五歳未満で見ると全日本医師会に加入していない割合は七割にもなる。

なぜそうなっているのか。原因の一つに勤務医の声を反映させるべき代議員や理事の数が非常に少ないことがあげられる。つまり全日本医師会は医療機関の経営者、特に数が多い開業医のための団体だと言っても過言ではない。

無報酬勤務医が五千人近くいると言われているが全日本医師会もそして厚生省も沈黙したまままで実態調査することはない。そのほか低賃金で働いている勤務医も多くいるようだが実態はまったく分からない。会費が非常に高いという面もあり収入の少ない勤務医は医師会加入を躊躇しているのかも知れない。

このような現状を座長が涙で訴えているのだろう。

「……勤務医は使命感のみで新型コロナウイルスに立ち向かっています。しかも治療に当たったの武器を満足に与えられることもなく。もちろん一部の開業医も立ち上がりつつありますが、

医師全員が結束しているという状況ではありません」

ここで座長は力尽きたようにうづくまるが、日頃からスピード感のない政府関係者はすぐ駆け寄らない。田中がもらい泣きする。

薬害エイズや勤労統計資料紛失事件など様々な不祥事を起こしては隠蔽や嘘を重ねた厚生省。それに小規模な病院や診療所の医師の利益を守るために動く医師会は勤務医に対して無情だ。そして厚生省も医師会も沈黙を続ける。足りないベッド数を補う医師として無給の医師も駆り出される。健気にも医師の使命だと現場で頑張るがその身体はボロボロになっている。

責任をとらない政治家に代わっていつも詰め腹をとらされる厚生省の幹部と全日本医師会の体質が制度上の壁となって立ちはだかっているのは間違いない。いくら山本が頑張っても、不思議なテレビがあつてもいかなともしがたい。

座長の勇断でそれまで以上に注目を集めた専門家の諮問会だが、その人選はどのような行われているのか。これに関しては山本の取材力で説明された。

「日本国学会の人事で政府は批判的な意見を述べる数人の学者を任用しませんでした。学会は政府の機関ですから政府に人事権があります。しかしながら専門分野で造詣のある研究をしてきた学者の実力を素人の政府が見極めることは困難です。ノーベル賞の選考委員会は高度な知識を持った学者で構成されているように、学会内で人選するのがベストだということは

理の当然でした。だからこれまで政府がその人事に介入したことはありませんでした。推薦されればそのまま認めていました。ここに来て現総理がはじめて総合的に俯瞰的に横やりを入れたのです」

山本の説明が続く。

「首相は税金を投入している以上政府が人事に口出しするのは当然だとうそぶきます。それなら税金を納める国民に尋ねればいいのですが、税金を使う権限は政府にあると言わんばかりの乱暴な意見を述べる。つまり総合的俯瞰論です」

しかし、今までと違った方法をとる場合、その時々には選挙はできないから、せめて何らかの方法で国民に問いかけて空気を読み取って「こうしよう」と説明すればいい。政治とは空気を読むことだから、それが長けている人が首相になっているはず。何も難しい話ではない。

「山本さん。ちょっと質問してもいい？」

田中がテレビに向かって手を上げる。

「いいわよ」

「日本オリパラ委員会というのは公益法人だと聞いているけれど、税金を投入しているんですよ？」

「もちろん投入されているわ。しかも何千億という巨額な税金が」

「今回会長が女性蔑視発言したけれど首相はおろか誰もその発言をとがめない。日本国学会

の予算は年間十億円程度。それなの首相は執拗なぐらい人事に口出ししたよね。何千億円もつぎ込んだ事業を運営するオリパラ委員会の人事になぜ介入しない？」

「答えは簡単。会長は元首相。大先輩なの。『首』って言えるわけないでしょ」

「なるほど！ 元首相だったんだ」

「納得されると困るのですが」

山本がうつむく。

「じゃが国民は首相と違って常識という武器を持つておる。この武器は非常に小さな武器じゃが、集めると強力な武器になるのじゃ」

「そういえば与党の幹事長も国民に武器を与えましたよ」

すかさず山本が幹事長のコメントビデオを流す。老害ウイルスをまき散らすような口調が聞こえてくる。

「しばらくしたらじゃ、落ち着くところに落ち着くのではないか」

要は時間が経てば誰も忘れてしまうと言うことだ。しかし田中が語気を強めて反論する。

「オリパラ委員会の会長の発言も事が冷めれば批判は立ち消えになるとでも言いたいのだ。山本さんの言うとおりのこの発言は国民に大きな武器を与えたことになる」

幹事長は会長を援護したと思っていただけのところが、田中の予想通り国民の怒りの矛先は幹事長やその取り巻きで大臣になった国会議員を巻き込むことになった。誰のためのオリンピック

やパラピックなのかを忘れた失言。大会がオリパラ委員会の会長や政権与党のためのものだと錯覚している。選手も国民もそして世界中の人々もこの基本的な考え方をなぜ会長や首相たちが気付かないのか不思議と言うより怒り心頭になった。

「上からの景色と下からの景色が違うのは当たり前なのに。もともとみんな下から見ていたじゃないか」

「なるほど。田中さんいいこと言うじゃないか」

大家が感心すると山本が拍手する。

「広報官のあの程度の対応なら誰でもできるわ。私ならもっとうまくやってみせるわ」
山本の鼻が天狗のようになる。